川崎平右衛門と都市農業

12月10日（日）、川崎平右衛門フェスタ２０２３in西東京市を西東京市田無にあるコール田無多目的ホールで開催した。主催は川崎平右衛門フェスタin西東京市実行委員会、川崎平右衛門顕彰会。13：00～16：50、前半は３本の歴史講話、後半は「西東京市における農あるまちづくり」をテーマにパネルディスカッションを行った▼武蔵野新田開発は八代将軍・徳川吉宗がひっ迫した幕府財政を立て直すために行った享保の改革の柱の一つ。茫々とした草地で水も少ない武蔵野台地を農地に変え、年貢の徴収を可能にすることを意図したものである。１７２２年に日本橋に高札が掲げられ新田開発への取組みが開始されたが、事業は難航を極め、生産は滞り、定着できずに夜逃げする農民が後を絶たなかった▼この事業は現場、農業を知る者でなければ困難として、責任者である大岡越前守に武蔵野新田世話役として取り立てられたのが武蔵野国押立村（現在の府中市押立村）の名主川崎平右衛門であった。見事、新田開発を成功させた平右衛門は、その後木曽三川の治水工事、石見銀山の再興に当たった。平右衛門は協同の心を大事にし、協働作業による村づくりをすすめたが、その活躍は二宮尊徳よりもほぼ百年前に遡る▼平右衛門がいま生きていたら何をするか、を原点にして「農あるまちづくり」をテーマに都市農業者、コミュニティガーデンや体験教育に関係する市民によるパネルディスカッションを行った。都市農業者は多様で商品性の高い農産物を生産する。これを市民消費者は地産地消で応援するとともに、体験農園・援農等で農業に参画し、農をつうじてのコミュニティづくり、そしてまちづくりをすすめていく、というのが落ちとなった。

（土着菌）